

## 巻頭言

### 手工芸のもつ意味

吉備国際大学 難波 悦子

私の臨床経験は、総合病院における身体障害分野の作業療法であった。整形外科、外科、脳外科、内科の患者さんが対象であり、彼らが急性期から回復期に向かう頃になると、気晴らし訓練と称して革細工、籐細工、紙細工などをグループでやっていた。手工芸を気晴らしと称してやっていたのであるから、重点は機能回復訓練ということになる。しかし、よくよく考えてみると、手工芸は複雑な工程と作業を経て作製される。様々な持てる能力を駆使するし、完成すると満足感や達成感に浸ることがほぼ常である。この度手工芸の科目を教えることになった立場から、なぜ米国の初期作業療法関係者が手工芸に目を付け、その持てる力を借りて患者の回復につなげたのかを知りたいと思い、調べた。

以下は、作業療法が誕生する19世紀末から20世紀初頭の米国の社会状況と作業療法士の活動である。

1890年には米国の大陸の膨張は一段落し、フロンティアラインの消滅が宣言された。米国は世界第一の工業国に躍進し、鉄道建設それに並行した急速な都市の成長は、重工業製品のみならず、消費物資の膨大な全国市場を生み出していた。この市場を舞台にして独占企業が出現し、これら巨大な経済権力は人びとに衝撃を与えた。大衆には機械生産による低価格の製品が提供された。

一方、1890年から1920年までの30年間に、1800万人の移民が渡来した。彼らは南欧・東欧からの「新移民」であった。彼らは最低の賃金、最悪の労働条件で働き、アメリカ社会の下層労働者階級を構成した。新移民は北部の大都市に集中し、都市人口の三分の二以上を占めていた。

これら独占産業社会のもつゆがみとそれにともなう政治の腐敗に対して、農民や労働者からの不満の表明や、都市中産階級、一般消費者を含む広範な地域の多くの階層・職種の人たちから改革を求める声が高まってきた。革新主義改革、婦人参政権運動、教育や労働条件の改善、慈善事業、そして禁酒運動にまで及んだ。

こうした社会状況のなか、19世紀末から出現した新しい体制のなかに、新中産階級として一括しうる多様な人びと、医者、法律家、教師、行政職、建築家、あらたに出現した社会事業家などの専門職の人びとがいた。彼らの社会的評価は低かったものの、都市的・工業的な世界の拡大につれて、この人びとの需要と評価は次第に高まり、彼らは自らの専門的知識による活動の場と地位向上の機会を見いだしていた。

作業療法の設立者もこの専門職誕生の流れの中におり、作業療法が産業化、都市化の有害な影響によって犠牲にされた病者の健康や機能を回復させるのだという考えをおし進めた。作業療法士は患者がヘルスケアのために体 (body)、心 (mind)、精神 (spirit) を癒し (healing) の過程に引き込むのだと信じ、全体的な (holistic) アプローチを行なった。癒しは患者が手工芸製作に夢中になっている時に生じた。作業療法士は個々の患者の相互交流や彼らの目を観察することで、作業療法が身体機能を回復し、態度を改善し、悩みを軽減し、そして回復を早めることを学んだ。

つまり、手工芸に夢中になっている時に癒しが生じるのだ。確かに夢中になって我を忘れるという言葉があるように、きびしい状況のなかでこそ、そこに至福の時流れ、癒されていくような気がする。手工芸のもつ癒しは作業療法の大いなる価値として使えるものではないだろうか。

(文献)

志邨晃佑：革新主義改革と対外進出。有賀貞・大下直一・志邨晃佑・平野孝（編），世界歴史体系アメリカ史2，山川出版社，101-195. 1996.

Virginia.A.M.Quiroga: Occupational Therapy: The First 30 Years. The American Occupational Therapy Association, Inc. 11-26, 29-32. 1995.